九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

梵文古寫經雜報 ： 朝鮮發見ターラ葉篋十萬頌般若と福岡縣求菩提山國寶銅版法華經の梵文陀羅尼について

干潟, 龍祥

https://doi.org/10.15017/2545019

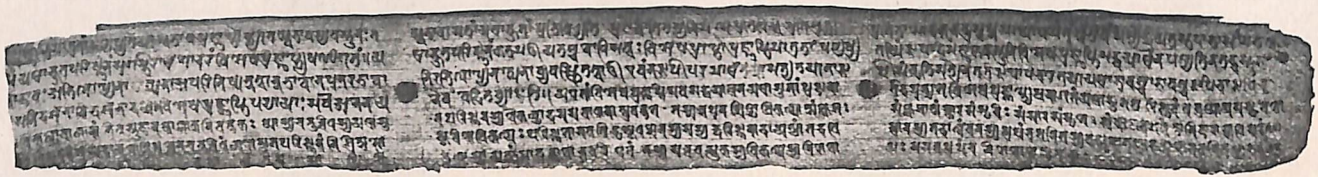
出版情報：哲學年報. 2, pp.85-100, 1941-03-31. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

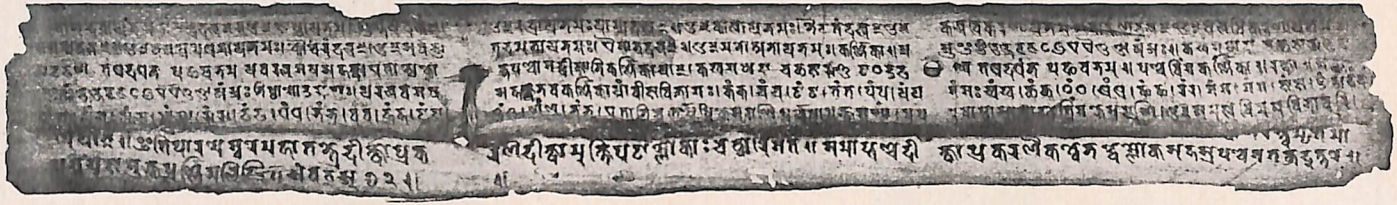
梵文古寫經雜報

——朝鮮發見ターラ葉篋十萬頌般若と
福岡縣求菩提(クボテ)山國寶銅版法華經の梵文陀羅尼について——

干潟龍祥

(參 考) Cambridge University Library Mss. Add. 1702.



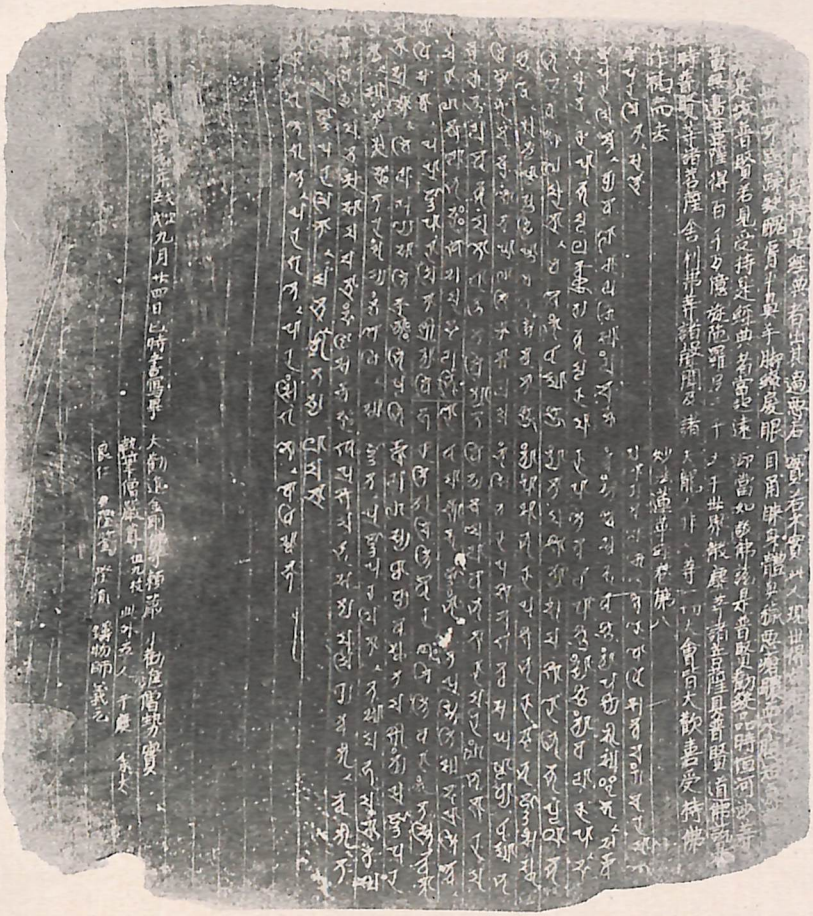


Mss. Add. 1049. (Samvat 252=A.D. 857 or 8)

Mss. Add. 866. (Nepal samvat 128=A.D. 1008)

福岡縣筑上郡求菩提山國寶銅版法華經

第三十三葉表　法華經の終、梵文般若心經、及、銘



九州帝國大學へ寄托（朝鮮發見、山本正太郎氏所有）

ターラ葉古寫　梵文十萬頌般若波羅密多經、第三七〇葉裏

同　上　　第三七一葉表 (19.5×2) 寸

（一）　タ一ラ葉古寫梵文十萬頌般若波羅密多經について、（山本正太郎氏所有、九州帝國大學印度哲學研究室へ寄托）（寫眞參照）

數年前予は當時在朝鮮黃海道新幕驛前山本正太郎氏から、朝鮮にあつたものと傳へられ同氏の所有にかゝる梵文タ一ラ葉篋二帙三百數十葉の鑑定を依頼された。予これを調査せる結果、これは梵文十萬頌般若波羅蜜多經（Daśasāhasryā-prajñāpāramitā-sūtra 玄奘譯の大般若經六百卷の初四百卷に當るもの）の一部分であることがわかつた。しかもかなりの古寫經で、貴重な資料であるから、不取敢本學印度哲學研究室に寄托して貰つた。梵文十萬頌般若は普通は四帙になつて居るのであるから[1]この寫本も恐らくは四帙になつて居たものであらう。然に今こゝに手にするものは二帙のみである。而して右山本氏の談によれば、かなり以前迄は三帙はあつた筈の由であるが、その中の一帙は今如何なつたかわからぬといふことであつた。しかもこの現在の二帙も、葉數順序が頗る斷續的に混然雜然として居てこれを正當の順序に揃へるには、それだけでも一苦勞であつた。これは恐らく三帙はあつたものを或時期に於て何もわからぬ人がごつちやに集めて、それをいゝかげんに三分して三帙とし、而してその中の二帙が今手にするものとなつたのであらうと想像される。從つて現在のものの缺葉[2]は恐らくは今行方不明になつて居る所の第三帙の中へまぎれ込んで居るのであらう。予は山本氏にその行方不明の第三帙について心當りを尋合はして貰ひたいと依頼し、同氏も固よりかなりに探索せられたらしいが、全くわからぬといふことであつた。然し恐らく朝鮮か日本かに於てまだ在るに相違ないと思はれる。それが出て來れば、たとひ第四帙が（あつたとして）缺けて居るにしても、初三帙だけでも研究上相當價値あるものであるから、大方の諸賢、希くは常に留意せられて、もし發見せられた場合には、直ちに御一報を煩はしたい、予がこの文を草した所以はたゞこの事を御願したいからであつた。

右の如く現存の二帙のみでは、何分缺葉が多い爲に研究資料としてもその價値はかなりに減殺されて居るが、然しこの寫本はその字體より判斷して大凡西曆十世紀頃のものと思はれるものであつて、現在梵文古寫經中ではかなりに古い方に屬するものである。現存梵文古寫經は、中亞諸地方や我が日本に斷片的に存在するもの[3]を除いては、ネパールのターラ葉本現在英國ケンブリッヂ大學圖書館藏 No. Add. 1702.（瑜伽師地論中菩薩地）や、日本法隆寺ターラ葉本[4]（現在御物）が八世紀後半位、ケンブリッヂの No. Add. 1049.（これは印度教關係のもの）が九世紀中頃のものであるが、かく古いものは實に寥々たるもので、多くは十二三世紀以後のものである。今この寄托本はその字體よりして前記ケンブリッヂ圖書館の No. Add. 1049 に近いがそれより幾分か新しく、しかし十一世紀の初のものなるケンブリッヂ No. Add. 866 のものや、日本東京帝大の八千頌般若のターラ葉梵本 No. 1 及 No. 4[5] より幾分古いと思はれるから、大體十世紀中のものと見て大過なからう。しかも書風もなか〳〵立派である[6]（寫眞參照）。十萬頌般若の寫本は完本は、Pratapachandra Ghosa 氏がこの經の校訂出版（實は初めの一部分しかまだ出て居ないが[7]）の際、ネパールの學者から得た寫本と、ベンゴールのアジヤ協會に一部と、東京帝國大學に一部とある位で、其の他にケンブリッヂ圖書館、英國王室アジヤ協會、東京帝國大學等に一部分づゝあるのみで、しかも何れも近世の寫本であるから、それだけ價値も低いと謂はねばならぬ。もし今のこのターラ葉寫本がせめて三帙でも揃つて居れば實に世界的に貴い資料であるのである。然し現存の二帙のものでも出版をする場合などには是非參照の必要あるものと思ふ。

かゝる貴重な資料が朝鮮にあつたとは又奇異とせねばならぬ。何時頃如何なる經路で傳來して朝鮮にあつたかは、山本氏自身も御存じ無き如くである、これも我々としては是非知り度い所であるが、目下は手がゝりがない。ともあれ、かく珍貴な寫本が九州帝國大學に寄托せられて我々の研究に委せられたことに對して、所有者山本氏に深く感謝

の意を表し、併せて今や行方不明になつて居る他の帙の探索について江湖諸賢の御協力を請ふ次第である。

（二）求菩提山の國寶銅版法華經の梵文陀羅尼について、

昭和十五年九月初、福岡高等學校教授玉泉大粲氏の來訪を受け、福岡縣筑上郡求菩提山國玉神社所藏の國寶銅版法華經の寫眞を示され、且同教授の言はれるには――この最後に附してある梵文は「日本國寶全集」の解説には、たゞ「梵文陀羅尼を附寫し云々」とあるのみであるが、自分は今回これを調査した所、これは陀羅尼と稱すべきものではなく、どうも般若心經に相違ないと思はれるから、一つ精査して見てくれ――とのことであつた。予はこの寫眞を手にとり見るに、玉泉教授の推察通り、明に般若心經の梵文であつて、決して梵文陀羅尼などゝ片づけてしまふわけにはいかぬものである。（般若心經が全般若經の陀羅尼的性質のものであるといふことは謂ひ得るとしても、日本國寶全集の筆者がかゝる意味で言つて言るのでないことは明である。）

銅版に法華經全部を寫刻したものは現在他に見られない[8]といふ點に於ても珍重せらるべきものであるが、予の特に珍貴とする所は、この銅版寫經には、前述の如く末尾に梵文般若心經が附刻しあり、又、その第廿六陀羅尼品に於ける陀羅尼、及、第廿八普賢菩薩勸發品の陀羅尼が、全部梵字で書かれて居ることである。法華經は古來最廣く信仰せられた經であり、從つて寫經せられたことも頗る多いが、羅什譯法華經の陀羅尼の部分を全部梵字で書いた例は（不空譯法華儀軌から拔抄したと思はれる東寺觀智院及寶菩提院にあるものは別として）予は寡聞にして知らない。（全くないわけではなからうと思はれるから、もし御氣付の方あらば切に御教示を願ひたい。）しかもこれがその銘[9]にある通り、康治元年（皇紀一八〇二）の寫刻であり、しかも當時文化の中央より離れたこの筑紫の山の中にあるのであるから一層珍とすべきである。求菩提山は天台系の修驗道の山で、史跡もある筈だから、是非一度參つて見たいとは思

ひながら、未だ果さずに居たが、今こゝに坐ながらにしてその至寶の寫眞（福岡縣廳川上市太郎氏撮影）に接し、これを精査するの機を與へられたことを深謝しつゝ左にその結果を報告する。

先づこの銅版寫經の陀羅尼品、及、普賢菩薩勸發品の梵字で書かれた陀羅尼を見るに、これはその原文が本來の梵文のものを手にして居たのでなくして、むしろ羅什譯にある漢字音寫のものをそのまゝ梵字に還元せんとして出來たものであつたのであらうと思はれる、從つて正しい梵文陀羅尼ではない。固より陀羅尼には普通の意味ある言葉のみならず、普通では意味のわからぬ呪文呪字もあるのであるから、今日の我々では何れが正しいかを判定することは困難な場合も少くない。南條文雄博士とケルン氏との共同校訂に成れる梵文法華經（一九一二年露國學士院出版）を見ても、隨分疑問が多い。而してこれはネパール系統の本を底本としたのであるから、羅什譯や竺法護譯の原本となつたもの[10]とはかなりの差のあるべきことは當然であり、むしろ後世の不空譯法華經儀軌のものと大體合つて居る。予は別表（一）に於て、この銅版の梵字と羅什譯漢字と、南條ケルン校訂本のものと、最後に予が竺法護譯（これは意味を譯出したもので、音寫ではない、從つて無理も多いが原語を推測するには都合のよいこともある）をも參照して校訂したものとを對照せしめたが、これによりても知られる通り、本銅版のものの御手本となつたものは本來の梵文のものではなくて、（實際當時日本に法華經の梵文は無かつたと思ふが）恐らく日本で、この寫刻の出來る以前に於て、何人かゞ羅什の漢音寫のものを梵字に還元せむと試みて出來たものであらう。從つてその爲と思はれる過誤も少くないが然し梵語の出來ぬ者では到底なし得るものではないといふことは言ひ得る。（現在のこの銅版のものは、それをあまり梵語を知らぬものが複寫したのであらうから、その爲に生じた寫誤は勿論少なくない）。

次に末尾に附してある梵文般若心經の方を見るに、これも寫刻の御手本となつたものがあつたに相違ないが、その

ものはやはり印度から傳はつた梵本ではなく、又、その寫本でもなくて、恐らくこれもこの寫刻の出來る以前に、日本で多少梵語の出來る人が、印度傳來の梵本を知りながら、世間流布の（卽、玄奘譯の）般若心經に逐字的に强いて合はさうとして書いたものの如くである。（別表（二）參照）勿論かゝることは梵語の全然出來ない人のやれることではなく、又、相當出來る人でも全然印度傳來の梵文般若心經を見たことのない人ではやれさうにないことである。そこでこれらの點を考ふるに、これを爲した人も、先きの法華經の陀羅尼を梵字で書いた人と同一人であらうと推定される。[11] 從つてこの銅版刻文の御手本になつたものは、恐らくこの刻文の如く、法華經（その陀羅尼の部分は梵字で書き）と其の末尾にかゝる梵文般若心經が書いてあつたものであらう。[12] それをこの寫刻の發願主なる賴嚴か誰れかゞ、[13] これは珍らしく、有り難いものとして、こゝに刻寫せしめたのであらうと思はれる。

梵文般若心經の古寫本は日本にはかなりに多く殘つて居るが、しかしその中先に一言せる法隆寺のターラ葉本を除いては何れも書寫當初のものが現存するや否やは疑問である。[14] 現在我々の見得るものは複寫に過ぎない如くであるが、複寫としてもこの銅版のものより古いものは殆どないと謂つてよいであらう。東寺觀智院に天慶五年長敏書寫のものがあるといふことであるが予は未だ確めて居ない。それが在るとしても、今この銅版のものは古さに於て日本第三位になる、況んやその長敏書寫のものが失はれて居れば、これが第二位になるわけで、かゝる意味に於て貴重なものである。又たとひ梵文そのものは先に言へる如くいかがはしい點が多くあるとするも、その頃の日本に於てこれだけのことをやり得る學者が居たといふことを證する一つの資料として大切なものである。

かくの如く貴重なものが附せられて居るにも係はらず、これを單に「梵文陀羅尼を附寫し云々」としてすまして居る日本國寶全集解說者の態度は甚遺憾である。日本國寶全集は大正十三年以來發刊されて居るのであるから、筆者の

署名はないが、兎に角この解説も大正十三年前後以後に書かれたものであらうが、さすればその頃には我國には梵語の讀める人は少くも二十人や三十人は居た筈である。それらの誰れかに一寸尋ねれば、これが何であるか位は直ちにわかつた筈だが、その勞を惜しんで簡單に片づけてしまつたことは、學者がその領域に閉籠つて、他との聯携綜合研究を忽諸に附して居た一つの弊を表はして居るものとして誠に殘念に思ふ。この點につき將來の日本の學者は互に相誡めて前者の轍を覆まぬやう注意せねばならぬ。（昭和十五年十二月十六日）

別表（一）陀羅尼品の陀羅尼

（第一陀羅尼は銅版第三十一枚の表に、第二，第三，第四，第五陀羅尼は其の裏に刻しあり）

第一	銅版	anye	manye	manye	mamanye	cile	calite	śame	śamitāvi	śante	mukte
	什譯	安爾	曼爾	摩禰	摩摩禰	旨隸	遮梨第	賒咩	賒履多瑋	羶帝	目帝
	南條	anye	manye	mane	mamane	citte	carite	same	samitāvi -	śānte	mukte
	訂正	anye	manye	mane	manmanye	cire	carite	śame	śamitā-'	bhiśānte	mukte
	銅版	muktame	same	aviṣame	same	same	kṣaye	'kṣaye	akṣīti	śante	śame
	什	目多履	裘履	阿瑋裘履	桑履	裘履	叉裔	阿叉裔	阿耆賦	羶帝	賒履
	南	muktatame	same	aviṣame	sama-same	jaye	kṣaye	akṣaye	akṣine	śānte	samite
	訂	muktatame	same	aviṣame	same	same	kṣaye	'kṣaye	kṣīne	śānte	śame
	銅	dhvaraṇi	alokabhāse	pratyavikṣati	nivitya	abhyantaranimeṣṭi					atyanta-
	什	陀羅尼	阿盧伽婆裘	簸蔗毘叉賦	禰毘剃	阿便	哆邏禰履剃				阿壹哆
	南	dhāraṇi	ālokabhāṣe	pratyavekṣaṇi	nidhiru	abhyantaraniviṣṭe					abhyanta-
	訂	dhāraṇi	ālokabhāṣe	pratyavekṣaṇe	nirvedhe	'bhyantaraniviṣṭe					'tyanta-

銅　pāreśuddha　ukkule　mukkule　arale　paralè　sukakṣī　asamâsamo　buddha-
什　波隷輸地　漚究隷　牟究隷　阿羅隷　波羅隷　首迦差　阿三磨三履　佛馱
南　pāriṣuddhi　mutkule　mutkule　araḍe　paraḍe　sukāṅkṣi　asamasame　buddha-
訂　pāriśuddha　utkūle　vikūle　'rāle　prārāle　sukāṅkṣe　'samâsame　buddha-

銅　vikriḍite　dharmaparikṣīte　soṅghanirghoṣani　bhāsyabhāsyaśaddhi　mantra
什　毘吉利袠帝　達磨波利差帝　僧伽涅瞿沙禰　婆舍婆舍輸地　曼哆
南　vilokite　dharmaparīkṣite　saṃghanirghoṣaṇi　nirghoṇibhayâbhayaviśodhani　mantre
訂　vikrīḍite　dharmaparīkṣite　saṃghanirghoṣaṇi　bhāṣyabhāṣyaśuddhe　mantre

銅　mantrakṣayāta ▱▱kurutakauśalya akṣala　akṣayetaya　avalo　āmanyanataya.
什　曼哆羅叉夜多　郵樓多郵樓哆憍舍略　惡叉邏　惡叉冶多冶　阿婆盧　阿摩若那多夜
南　mantrakṣayate rune runakauśalye akṣaye akṣayavanatāye vakkule valoḍa amanyanatāye svāhā.
訂　mantrâkṣayita　uktā-uktakauśalye 'kṣare　'kṣayayitavya　udbale[1]　'mānayitavye.

（註）(1)　羅什譯及法護譯に從れば abale（無力）とすべきが如きも，それでは意味取り難き故に udbale（强力）として見た。しかし確信は持てぬ。

第二　銅　jvāle　mahājvāle　ukki　mukki　ale　alavati　nṛte　▱tavate　ityini　vityini
什　痤隷　摩訶痤隷　郁枳　目枳　阿隷　阿羅婆第　涅隷第　隷多婆第　伊緻梶　韋緻梶
南　jvale　mahājvale　ukke　tukke　mukke　a le　aḍāvati　nṛtye　nṛtyāvati　itṭini　vitṭini
訂　jvāle　mahājvāla　ulka-ulmukye　'lle　'lavati[2]　nṛtye　nṛtyāvati　itṭini　vitṭini

銅　cityini　nṛtyini　nṛtyivati.
什　旨緻梶　涅隷埠梶　涅梨埠婆底
南　citṭini　nṛtyani　nṛtyāvati svāhā.

訂　ciṭṭini　nṛtyini　nṛtyāvati.

（註）(2)　alle 'llavati 純粹 sanskrit では ārdra ārdravati と見た。

第三　銅　ali　nali　tonali　analo　nali　kunāli

什　阿梨　那梨　毳那梨　阿那盧　那履　拘那履

南　aṭṭe　taṭṭe　naṭṭe　vanaṭṭe anade nādi kunādi svāhā.

訂　aṭṭe　naṭṭe 'nunaṭṭe 'naṭṭe nande　kunande　（この第三陀羅尼は，銅版のものでよいかも知れぬ）

第四　銅　agaṇi　gaṇi　gauri　gandhari　ceṇḍali　mātaṃgi　saṃkuli　vrūṣani　asti

什　阿伽禰　伽禰　瞿利　乾陀利　旃陀利　摩蹬耆　常求利　浮樓莎柅　頞底

南　agaṇe　gaṇe　gauri　gandhāri　caṇḍāli　mātaṅgi　saṃkule　vrūsali　sisi svāhā.

訂　agaṇe　gaṇe　gauri　gāndhāri　caṇḍāli　mātaṅgi　jānguli　vrūsani　aste.

第五　銅　itime　itime　itime　atime　itime　time　time　time　time　time　ruhe　ruhe　ruhe

什　伊提履　伊提履　伊提履　阿提履　伊提履　泥履　泥履　泥履　泥履　泥履　樓醯　樓醯　樓醯

南　iti me　iti me　iti me　iti me　iti me　nime　nime　nime　nime　nime　ruhe　ruhe　ruhe

訂　iti me　iti me　iti me　iti me　iti me　nime　nime　nime　nime　nime　ruhe　ruhe　ruhe

銅　ruhā　stahe　stahe　stahe　stāhe　stāhe

什　樓醯　多醯　多醯　多醯　兜醯　毳醯

南　ruhe　ruhe　stuhe　stuhe　stuhe　stuhe　stuhe　svāhā.

訂　ruhe　stahe　stahe　stahe　stūhe　stāhe.

普賢菩薩勸發品の陀羅尼

銅　adaṇḍe　daṇḍapati　daṇḍavarte　daṇḍakuśale　daṇḍasudhāre　sudhāre　sudhāre　sudhārapati

什	阿檀地	檀陀婆地	檀陀婆帝	檀陀鳩舍隷	檀陀修陀隷	修陀隷	修陀羅婆底	
南(○)	adaṇḍe	daṇḍapativate	daṇḍāvarte	daṇḍāvartani	daṇḍakuśale	daṇḍasudhāre	sudhāri	sudhārapati
訂	adaṇḍe	daṇḍapati	daṇḍāvarte	daṇḍakuśale	daṇḍasudhāre	sudhāre	sudhāre	sudhārapati

銅	buddhāpaśyeti	sarvadhāraṇi-avartani	sarvabhāṣa-avartani	su-avartani	soṅghaparikṣini
什	佛馱波羶禰	薩婆陀羅尼阿婆多尼	薩婆婆沙阿婆多尼	修阿婆多尼	僧伽婆履叉尼
南(○)	buddhapaśyane	sarvadhāraṇi-āvartane	sarvabhāṣya-āvartane	su-āvartane	saṅghaparīkṣaṇi
訂	buddhapaśyane	sarvadhāraṇi-āvartane	sarvabhāśa-āvartane	su-āvartane	saṅghaparīkṣaṇe

銅	soṅghanirghatani	asoṅghisoṅghapagati	tri-adhvasoṅghatulya rte prate	sarvasoṅghasamatikrati	
什	僧伽涅伽陀尼	阿僧祇僧伽波伽地	帝隷阿惰僧伽兜略阿羅帝婆羅帝	薩婆僧伽三摩地伽蘭地	
南(○)	saṅghanirghātani	asaṃge saṃgâpagate	tṛ-adhvasaṃgatulyaprāpte	sarvasaṃgasamatikrānte	
訂	saṅganirghātane	'saṅge saṅgâpagate	tri-adhvasaṅgatūryaprāpte	sarvasaṅgasamatikrānte	

銅	sarvadharmasuparikṣite	sarvasatvarutakauśalya-anogate	siṃ-a-vikriḍite.	
什	薩婆達磨修波利刹帝	薩婆薩埵樓馱憍舍略阿耆伽地	辛阿毘吉利地帝	
南(○)	sarvadharmasuparīkṣite	sarvasatvarutakauśalya-anugate	siṃhavikrīḍite.	
訂	sarvadharmasuparīksite	sarvasatvarutakauśalyânugate	siṃhavikrīḍite.	

別　表（二）　求菩提山銅版般若心經と正しき梵文般若心經との比較

〔　〕の中は銅版刻文に本來缺けたるを示す。〔——〕正しき梵文般若心經には不用なるを示す。

銅版　Prajñāpāramitā〔　　〕sūtro.
正　　〃　　hṛdaya sūtram.

銅 Athāryāvalokiteśvaro bodhisatva [ ] caryaṃ
正 〃 bodhisatvo gambhīrāyāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ

銅 caramāno prajñāpāramita vyavalokāyaki smā yaṃcaskandhaṃ stāmsca svabhāva-śūnyāṃ
正 〃 [————] vyavalokayati sma, pañcaskandhās, tāṃs ca 〃 -śūnyān

銅 paśyati sma. Iha sarva Śāriputra [ ] rūpānna pṛthak-
正 〃 〃 〃 [——] 〃 rūpaṃ śūnyatā śūnyataiva rūpaṃ, 〃 〃

銅 śūnyata [ ] [] pṛ[ ]rūpā [ ] rūpā taiva vā yā śūnyāṃ śūnyāṃ va yā rūpā
正 śūnyatā śūnyatāyā na pṛthagrūpaṃ, yad rūpaṃ sā śūnyatā yā śūnyatā tad rūpaṃ,

銅 [ ] □da[ ][ ]nāni. Eva Śāliputrā va venāṃdharmā
正 evameva vedanā-semjñā-saṃskāra-vijñānāni. Iha Śariputra sarvadharmāḥ

銅 śūnyatā ma śānyā hīma sa ro ji nna [ ] pṛ ṇa nna
正 〃 -lakṣanā anutpannā aniruddhā amalā na vimalā nonā na paripūrṇāḥ.

銅 pṛ su ddhe aṃ kṛ ṇṛ sudi ṣṭhā va dhe sti va tā śūnyāṃ yāṃ sā na rūpa sa na rū dānā
正 Tasmācchāriputra śūnyatāyāṃ [————————] na rūpaṃ na vedanā

銅 [] jñaṃ [] saṃskarā [] vijñāna [] cakṣu[]śrotraghrāṇajihvākāyamanāṃsi na
正 na samjñā na saṃskārā na vijñānaṃ, na caksuḥ-śrotra- 〃 , 〃

銅 rūpaśabdagandha []sa□praṣṭāvyā dharmā, na cakṣurdhāturyāvan na manodhātu
正 〃 -rasaspraṣṭavyadharmāḥ, 〃 〃 〃 manodhātuḥ 1),

銅 ta vidyā [ ]ta vidyakṣaye [ ] yāvanna jarāmaraṇaṃ na jarumara-
正 na vidyā(2) nâvidyā na vidyakṣayo 2) nâvidyakṣayo 〃 〃 〃 jarāmaraṇa-

銅　maraṇakṣayo na duḥkhasamudayanirodhamārgā, na jñānaṃ na praptiti sma.
正　〔——〕kṣayo, 〃　〃　〃　〃　〃 prāptiḥ

銅　da prāptitva bodhisatvo ya　prajñāpāramitāśrityā　viharati acittivaraṇaḥ
正　Aprāptitvena bodhisatvasya prajñāpāramitāmāśritya viharaty-acittāvaraṇaḥ.

銅　cittivarātastitvattā　atrasraṃ ▱ viparyāsātikrantaḥ niṣṭhanirvāyaṇastryadhvā
正　Cittāvaraṇa-nâstitvād atrasto 〔—〕 viparyāsâtikrānto niṣṭhanirvāṇaḥ Try-adhva

銅　vyavasthata　ma śrityam prajñāpāramitā　smata　anuttarasamyaksambodhi
正　vyavasthitāḥ sarvabuddhāḥ prajñāpāramitāṃ-āśrityânuttarām samyaksambodhiṃ

銅　〔　　〕 sma　jñāta〔　〕prajñāpāramitā tasmād mahāmantra tasma
正　abhisambuddhāḥ, tasmāj-jñātavyaḥ　〃　〔——〕 mahāmantro 〔——〕

銅　mahāvidyā-mantra 〔　　〕 asāmam mantrā　dāyi sarvaduḥkhaprasamana
正　〃　-mantro 'nuttaramantro 'samasamamantraḥ, 〔—〕 sarvaduḥkhaprasamanaḥ,

銅　satyam amithyatvatā tvatāta tyātha prajñāpāramitāmantratā tadyathā mantrā
正　〃　amithyatvāt. 〔——〕〔——〕 Prajñāpāramitāyām-ukto mantraḥ,

銅　tadyathā gate gate pāragate pārasiṃgate bodhi svāhā.
正　〃　〃　〃　〃　pārasaṃgate 〃　〃 .

（註）(1)　法隆寺本に從ひ manodhātuḥ とせるも，manovijñānadhātuḥ の方よろしからん。
(2)　navidyā と na vidyakṣayo とは法隆寺本に從り入れたれど，玄奘譯等の意味を考ふればこの二句は無き方よろしからん。

註(1) Calcutta, Asiatic Society's Library のもの(Mitra, Sanskrit Buddhist Lit. of Nepal, p. 177 參照)も、東京帝國大學のものも皆四帙になつて居る。しかも何れも一帙四五百枚宛のものである。今回寄托されたものの第二帙の最後の葉數は五九三になつて居るが、その前に五三〇の表の所に第卅四品廻向品終(Pariṇāmanāparivarittaś caturviṃśatimaḥ)とあり、これは玄奘譯の第卅一品隨喜廻向品の終りで、全體の半分より少し前であるから、まづこの二帙で全體の丁度半分に達して居ると見られる、故にこれもやはり全體四帙あつたものと見てよからう。

註(2) 現在ある葉番號は二帙を通じて左の如くである。即相當に缺葉のあることがわかるであらう。

9, 12, 56—65, 105—113, 116—119, 121—146, 148—152, 156—198, 200—206, 221, 225—255, 257, 260—280, 294, 354—387, 391—394, 396—401, 403—409, 458—465, 467, 470—476, 478—479, 488—495, 497—504, 507, 509—513, 518—530, 532—534, 537, 539, 541—545, 547, 550—562, 565, 567—569, 572—589, 591—593.

この外に葉番號の字が消失して不明のものが二三十枚ある、丹念に讀めば何處へ入れるべきかはわかるものがある筈だが、今はその暇がない。

註(3) 斷片的に存在するものでは、中亞地方出土のもので五世紀のものがあり、日本にも八世紀初位のものはある。

註(4) これは二葉あり、初めに般若心經、次に佛頂尊勝陀羅尼、最末に悉曇字母を附す、筆寫年代については予は「密教研究」第六十八號頁四五以下に詳論し、從來の學者がこれを六世紀初のものとする說を否定しておいた。

註(5) 兩者共ネパールの年號あり、前者は一六九(西歷一〇四九)、後者は一六二(西歷一〇四二)である。

註(6) 後世(大凡十二世紀—十四世紀)補筆した部分も少々ある(例、第一〇九、一四二、一三四、一五一、一七九の如きは全葉)しかしこれは字體が新しいから一見直ちに見分けられる。

註(7) 一九〇二年以來カルカツタ Bibliotheca Indica から出版しつゝあるが、漸く初の一部分だけで、容易に完結しさうにない。

註(8) 大分縣西國東郡東都甲村大字加禮川長安寺にやはり國寶銅版法華經があるが、これは本來は卅八枚程あつたらしいが、現存するは十九枚のみである、刻書年代は保延七年九月十四日供養畢と銘にあるから、今この求菩提山のものより一年古い。梵文は無かつたのであらう。(「考古學雜誌」第十八號田中一松氏論文、及「考古學講座」第廿卷石田茂作氏著經塚參照)

註(9) 銅版は三十三枚、縱七寸又は七寸一分、橫五寸九分乃至六寸四分、兩面に刻しあり寫眞に示せる如く三十三枚目の裏初を以て法華經は終り、その次に梵文般若心經あり、最後に左の銘文がある。

「康治元年壬戌九月廿四日巳時書寫畢大勸進金剛佛子願嚴小勸進僧勢實執筆僧嚴尊但九枚此外五人、千慶、餘太、良仁、隆監、隆徹、鑄物師義元」

註(10) 羅什譯(支那日本で普通使ふもの)は五世紀初の譯、竺法護譯は三世紀後半の譯であり、何れもその原本は西北印度から中亞地方を經て來たもので、中印度に長く傳はつて居て後ネパールに傳はつたものとは全體を通じて相當の開きのあることは明である。猶、南條ケルン校訂本は當時迄に知られて居た多くの梵文寫本を校合してあるが、殆どすべてそれはネパール系統のものである、たゞその中で、カシュガール地方より發見されて露國學士院に在る斷片は、それと異る種類のもので、此の方は羅什譯等によりよく合するものである。惜哉斷片で、卽、陀羅尼品の如きは全部缺けて居るらしく、しかし普賢勸發品の所は幸にあり、故に予は別表に於ては普賢勸發品の方はカシュガール本の方を出すことにした。

註(11) それが誰れであるかは固より想像も致し難いが、たゞ次のことを注意しておくに止める、卽、これより以前の人で、しかも平安朝初期の入唐八家以後で、日本の梵語學を中興した人とも謂はるべきは、天台宗の明覺で、この人は應德元年(皇紀一七四四)に悉曇要訣を著はして居るからその頃には相當梵語の出來る人が居たといへる。

註(12) 法華經の後に般若心經(梵文でない漢譯の)を書く例は勿論あつた如く、先きに註(8)に擧げた大分縣西國東郡長安寺のものにも刻してあるといふことである。

註(13) 頼厳は、求菩提山中興の人で宇佐郡の産であるが、豐鐘善鳴錄によれば、叡山に登り修業したといはれるから或はこの頼厳が叡山の學匠からこの原本を貰つて來たのではなからうか。

註(14) 澄仁本と稱せらるゝものがあつたといふことであるが、これは最澄と圓仁との將來本といふ意味であらう、安然の八家秘錄（元慶九、皇紀一五四五）にも梵唐對譯般若心經一卷澄仁とあるのがそれであらう、而して溯つて傳教大師將來越州錄に般若心經梵本漢字一卷とあり、圓仁求法目錄に梵漢兩字般若心經一卷とあり、兩者が殆ど同じものであつたところから、安然の頃迄には兩者を一つにして澄仁傳と呼んで居たのであらう。とも角これが在れば法隆寺ターラ葉本に次で貴重なものであるが、これは失はれたらしい。天慶五年の長敏書寫のものが、東寺觀智院に在るといふことであるが、これが存否は予は今照會中であるが、もしありとすればこれは澄仁本の複寫であらう。